

体験型海外教育実地研究 - 第5学年書道「毛筆で漢字を書いてみよう」 -

教育学研究科学習科学専攻カリキュラム開発専修 庄野 修一

1. はじめに

グローバル化が進む社会の中で教育もそれに遅れをとるまいと変化し続けている。学校現場では、総合的な学習の時間や国語科，社会科の時間を通して国際化社会に生きる子どもの教育が行われている。ALTの先生を招待しての授業や外国語の授業を行う等の経験は日本でもできる。しかし，私は，教師自身が実際に海外に出てその土地の風土や文化を肌で感じることや，海外の教育に直接触れることで日本の教育のよいところや教師としての資質が見えてくるのではないかと考えこのプログラムに参加した。

2. 実地研究の日程と概要

| 日付 | | 時間と場所 | 内容 |
|--------------|--------|--------------------------|--|
| 4/10 | 火 | 12:10-12:40 L304 | 履修等，説明会 |
| 4/19 | 木 | | 履修届ほか書類提出締め切 |
| 5/31 | 木 | 14:35-16:05 L304 | オリエンテーション ミニ講演会・フォーラムの打ち合わせ |
| 6/8 | 金 | 13:00-17:30 C527 | ミニ講演会 |
| 6/9 | 土 | 13:00-17:50 広島ガーデンパレス | 第3回学校間交流国際フォーラム |
| 7/5 | 木 | 14:35-16:05 L304 | 事前研究1 個別研究テーマの設定 授業実践研究の内容と方法 日本文化の紹介(エクスプローリス・ミドルスクール)についての内容と方法の打ち合わせ |
| 8/2 | 木 | 14:35-16:05 L304 | 事前研究2 授業の教材開発と指導法研究 指導案・教材・教具の交流と検討 |
| 8/30 | 木 | 13:30-16:05 | 事前研究3 指導案・教材・教具の交流と検討 日本文化の紹介(エクスプローリス・ミドルスクール)についての内容と方法の打ち合わせ |
| 9/11 | 火 | 14:35-17:00 | 直前打ち合わせ・日程等の確認 日本文化の紹介(エクスプローリス・ミドルスクール)についての内容と方法の打ち合わせ |
| 9/15 9/24 | 土 月 | | 米国における海外教育実地研究 (次のページを参照) |
| 11/1 | 木 | 13:30-16:15 C527 | 体験型教育実地研究発表会 成果の公開 |

| 日付 | | 交通等 | 訪問地・用務等 | 泊 |
|------|---|---|---|--|
| 9/15 | 土 | 広島ー成田 07:45-09:25 (NH-3128) 成田ーワシントン 11:10-10:40 (NH-2) ワシントンーローリー 12:45-13:59 (UA-459) | | 米国ーノースカロライ ナ州 Raleigh <u>Marriott Crabtree Valley</u> 4500 Marriot Dr, Raleigh, NC27612 TEL(919)781-7000 FAX(919)781-3059 |
| 9/16 | 日 | | East Carolina University 事前打ち合わせと準備 | Greenville <u>City Hotel & Bistro</u> 203 W. Greenville Blvd, Greenville, NC27834 TEL(877)271-2616 |
| 9/17 | 月 | | Wahl-Coates E.S. (Ms.Cynthia Watson) 学校見学 | Greenville 同上 |
| 9.18 | 火 | | Wahl-Coates E.S. (Ms.Cynthia Watson) 授業実践 | Greenville 同上 |
| 9/19 | 水 | | Duke University | Raleigh <u>Sheraton Raleigh</u> 421 S. Salisbury Street Raleigh NC27601 TEL(919)834-9900 |
| 9/20 | 木 | | Exploris M.S. 日本文化の紹介 Exploris Museum Natural Museum | Raleigh 同上 |
| 9/21 | 金 | ローリーーワシントン 10:25-11:31 (UA-7139) ワシントンーN. Y 12:30-13:51 (UA-3129) | ニューヨーク観光 | N Y <u>Raddison</u> <u>Lexington Hotel</u> 511 Lexington Avenue 48 th Street New York 10017 TEL(212)755-4400 |

| 日付 | | 交通等 | 訪問地・用務等 | 泊 |
|--------------|--------|--|----------|--------|
| 9/22 | 土 | | ニューヨーク観光 | N Y 同上 |
| 9/23 9/24 | 日 月 | N Y-成田 12:30-15:25 (NH-9) 成田-広島 17:25-19:00 (NH-3129) | | 機内泊 |

3. 実地研究授業

3.1 単元名 第5学年 書道科/国語科 「筆を使って、漢字を書いてみよう」

3.2 事前準備

本授業を行った初動機は、何か日本の文化のよさを米国の子ども達に伝えたいと思ったことに端をなす。筆者は、長年書道を学んでいることから、書道のよさをたくさん知っている。例えば、文字を芸術の対象と捕らえることや、筆で書くということの心地よさ、潤渇のおもしろさ、などである。その、書道のよさを米国の子ども達に伝えることは、日本の文化のよさを伝えることであると考え、本授業を提案した。

事前準備として、以下のような道具と、教材を用意した。

道具は、紹介のための文房四宝(硯、墨、筆、紙)、子ども達の創作用の、紙皿(硯として)、新聞紙(下敷きとして)、墨汁、筆、和紙、色紙箋、を準備した。

文房四宝を用意した目的は、子ども達に実際の書道の道具を、見て、触れてもらうためである。特に、固形の墨の香りが書道の匂いを印象付けて欲しいと願い、本物を用意した。書く文字が一字であること理由は、作品としてはまとめやすいという点と、今回は清書用の紙として色紙箋を一字用の型の物を用いることで、作品としてのでき上がりの構想を視点に入れた配慮となっている。

教材は、様々な漢字(夢、光、火、地、空、力、心)を書いた提示用のものを、23種類、子ども達が使う手本(提示用の漢字に筆順等を書き込んだもの)を製作した。漢字という文字に初めてふれる子ども達の配慮として、漢字の字形や、意味をじっくり見て、考える時間を与えることや、それぞれの漢字の下に、英語でその意味を書き加える工夫を行った。以下が、その提示用の作品である。



お手本には、筆順番号や、筆を進める向きを書き込む配慮を行った。以下の写真は、お手本と、筆者が色紙箋に書いた作品である。



〈お手本の例〉



〈筆者が色紙箋に書いた作品〉

3.3 学習指導案

Lesson Title: Let's attempt to write a kanji using the brush.

Lesson Author: Shuichi Shono

Date: September 2007

Grade Levels: 5

Subject: Calligraphy/Japanese

Description:

Through this lesson, the student deepens understanding about the kanji which is the culture of Japan and the calligraphy and will deepen understanding about the difference culture.

Objectives:

1. It finds that the calligraphy is the art of the line to express by the kanji to the students.
2. The students understand about the kanji themselves and their meanings.
3. The students find goodness of the calligraphy through the creating activity.

Materials, Resources and Technology:

To do a creating activity, the following implement is necessary.

- ・ brush
- ・ ink stick(Sumi)
- ・ bottle as a ink stone(suzuri)
- ・ plain writing paper(hanshi)
- ・ underlay(shitajiki)
- ・ paper weight(bunchin)
- ・ The paper to make a fair copy of

Procedure:

1. The explanation about the calligraphy.

Here, I will introduce about the general explanation of the calligraphy and the implements. Concretely, I will show some calligraphy tools and books. The book was inserted in the work which the calligraphy artist wrote. Also, I will explain the implement to student by using the real things. I will tell the students the fact that calligraphy has developed as kanji developed.

2. The explanation about the kanji. (Kanji quiz.)

The kanji was born in China. The kanji has own meaning by the character. Concretely, I will write some kanji on the blackboard and explain the meaning. Then, I will ask the

students what this kanji means.

3. The students write a kanji with the brush.

First, the students will prepare a brush, Japanese writing paper for the practice, sumi, a bottle, a paper weight. Next, the students will try writing. In the process, the students will learn various senses such as the difficulty and the softness of the brush. After the students practice on some sheet, they will make a fair copy on special paper.

3.4 授業の実際

60分の授業時間を頂き、5年生に書道の授業を行った。最初に、自己紹介を行い、学校のイメージや感想を話した。そして、次に書道という日本の文化の紹介と、その使われている道具(文房四宝)の紹介を行った。さらに、書道では漢字が表現の対象であることから、漢字についての紹介を行い、子ども達とたくさんの漢字について学ぶ活動を行った。その活動は筆者が、事前に準備した漢字の意味を考えるクイズ形式のものであった。子ども達にとっては、漢字の形をじっくり見ながら、意味を創造する時間となった。そして、準備した漢字を紹介したあと、実際に筆と墨で漢字を書く活動を行った。筆の持ち方から指導や、ゆっくり筆を運ぶことの注意、とめ、はね、払いなどの基本点画についての机間指導を中心に行いながら、創作活動を行った。初めて、見る文字、扱う筆にも関わらず、ほとんどの子ども達は字形を上手く捉え、中にはそっくりに書く子どもの姿も見られた。しかし、書くということが伝わらず、塗る、描くという行動をする子どもがいたことも事実である。出来上がった作品の鑑賞会をするはずであったが、時間の都合上、することができず書道のよさを子ども達が考える時間がなかった。そのため、最後に、口答で子ども達に、書道のよさと、書道という日本の文化を忘れないでほしいということ传达了。



3.5 考察

日本の子ども達は、書写の授業により、ある程度、筆や漢字を書くことに親しんでいるが、米国の子ども達は、初めて筆を扱い漢字を知る。その点を、配慮して一時間の授業でまとめていくということは、大変難しいものであった。授業全体を通して、子ども達が書道のよさを考える時間がなかった点が大きな反省である。漢字の形や意味を知る活動や、作品を制作する活動には、力を入れたのだが、本来の書道のよさを全体で共有する時間がなかった。その点について、授業後、担任の先生に作品を鑑賞する時間や、感想を共有する時間をしてほしいという趣旨を伝えたが、筆者、自らがそういった時間を授業内にもてるような授業案を作る準備が必要であったと感じた。

また、文字を書く活動では、ほとんどを机間指導により個別に書く様子から支援をしていったが、書く姿勢や筆の持ち方等を、もっと事前に丁寧に全体指導を行っておく必要があった。漢字を紹介する時間での工夫も反省したい。日本語での読み方やそれを全体で言うという時間や、筆順を全体で確認するという時間を加えることで、もっと漢字への理解が深まったように考える。

4. 体験型教育実地研究における自己変容

4.1 教育観の変容

アメリカでの授業実践を実際に観察し、そして指導するという事は、筆者に多くの教育観の変容をもたらした。第1に、子どもに焦点をあててみる。米国の子どもは、日本の子どもに比べて、活発に意見や質問をするイメージを持っていたが、授業を観察して、そのようなイメージを持たなかった。むしろ、静かで、先生の言うことをしっかり聞くということに気づいた。また、様々な人種の子ども達が同じ教室で学んでいることから、多様な文化で学ぶということがこのような教室のレベルの下でも行われているということを再認識した。第2に先生に焦点をあててみる。米国では教師の権限が大変強いということを知り、日本の実態を考えさせられた。第3に、授業に焦点をあててみる。特に、米国の数学の授業は日本の授業に比べることを中心に考察すると、みんなで考えを出しあう場であるとか、共有する場や、授業全体の一貫性といったものが、筆者の見た中ではほとんど見られなかったということが大きな違いであった。そこに、日本の授業のよさを再認識した。

4.2 自分自身についての変容

自分の気持ちを積極的に表現することを躊躇しがちな筆者にとって、このプログラムは、言葉が上手く通じないことを恐れずに、積極的に関わり表現するコミュニケーションの大切さを学んだ。また、筆者の少ない語彙力や文法力を駆使し、何とか授業をやり遂げたことは、大きな自信につながった。

4.3 グローバルマインドに関する変容

このプログラムを通じて、日本だけには、中々気づくことや、理解することが難しい、様々な文化や、学校で行われている指導実践、考え方、教師や子ども達の様子を実際に見て、感じて、気づくことができた。そのことは、筆者自身のグローバルマインドの育成という考え方の理解を促進させるものであった。参加前は、この考えは知っていたが、修辭過剰的に感じられ、筆者にとって意味は分かるが、深い意味でどうということということが分からなかった。しかし、参加後はアメリカでの具体的な文化の差異等が浮かび、同じ地球のもとで生きる、グローバル・シチズンの考え方に、より深い理解を生じた。理解することとは、様々な経験と結びつけることでより深く分かると言われるが、そのことをより実感した。自分の今まで持っていた、グローバルマインドを広げることに大変有効に働いたと感じた。

5. おわりに

本プログラムを通じて様々な学びを得た。それは、上で述べた変容でもあり、コミュニケーションすることを恐れず積極的にとり、お互いを理解しようとする国際理解の基本的な考え方を再認識したことである。また、この機会に、英語をもっと勉強したいという気持ちが強まったことも大きい。また、自分の研究している数学教育の分野においても文化的な視点からのアプローチを今後の研究の方向に入れる必要があると感じた。

これからの教師に必要な資質の一つとして、恐れずに表現することと、自国の社会や文化のみならず、他国の社会や文化にも興味関心をもって、積極的にコミットし、そのよさや差異に気づき感じる姿勢が、必要であると感じた。